



Title	日本語疑問表現通史
Author(s)	山口, 勇二
Citation	大阪大学, 1991, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/37781">https://hdl.handle.net/11094/37781</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 山 口 喬 二

博士の専攻分野  
の 名 称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 9925 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 3 年 10 月 16 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 论 文 名 日本語疑問表現通史

論文審査委員  
(主査) 教授 前田 富祺

(副査) 教授 徳川 宗賢 助教授 仁田 義雄

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文が対象としたのは、日本語の疑問表現、および、それと疑問的形式を共用する詠嘆・反語の表現、不確定成分、という一連の現象であり、時代的には、各時代を通じたその全体像と時代的な推移である。研究方法としては、その一連の現象全体を見通せる成立論的な原理と、同じく全体に有効な形態上の分類法をまず定め、その原理・分類法のもとに、対象にとって重要な側面ごとに視座を据え、順次、構文史的・表現史的な分析を重ねている。分析に際しては、一般的な構造や現象にまず注目すること、形式や意味相互の連続性・関連性を重視することを、何よりも優先させている。本論文はその意味で、疑問形式を共有する広義の疑問表現とその周辺の問題を広く検討し、日本語に深く根を下ろしているその現象の諸相と相互の関連性を、構文史的・表現史的に明らかにしようとしているものである。

本論文は、第一章から第八章までを第一編「疑問表現とその周辺」、第九章から第十二章までを第二編「不確定成分とその周辺」とし、大きく第一編と第二編に分れる。その二編が通しての章立てとなっていることで分るよう、全体としてまとまりのものとなっている。従来、疑問の気持ちを表すものだけを疑問表現として扱ってきたが、詠嘆・反語の表現も同じく疑問的形式を共有するものであり、広く疑問表現として扱うべきであるとともに、疑問詞、疑問助詞が不確定な意味を担うものとして用いられている不確定成分を含む平叙文も疑問表現に連なるものであるとしているのである。本論文はそのように広義に疑問表現を考える立場から日本語の疑問表現の歴史を見通したものとなっているのである。

以下、本論文の構成にしたがって各章の内容を述べてゆく。

第一編「疑問表現とその周辺」は、第一章から第八章までの全八章に分れている。第一章「疑問表

現の原理」では典型的な疑問詞の用法の分析を中心とする従来の研究方法を反省し、疑問文は、疑問解消志向のもとに、話手がみずから可能な解答案を提示することによって成り立つ、という基本原理を立て、そこに「問い合わせ」と「疑い」が含まれる理由、また、詠嘆・反語の表現や不確定成分に連続する理由を明らかにしている。第二章「疑問表現の方法と形態」では、そのような考え方に対し、広義の疑問表現とその周辺の不確定成分とを見通すことが必要であるとし、大きく不定方式と特定方式とに二分し、さらに後者を並列方式と単独方式に分けるという二種三類の構造的・表現的な類別法を提出する。第三章「疑問表現の情意」では、広義の疑問表現に担われる情意のありように注目し、疑問・詠嘆・確認・反語の表現において一般に担われやすい情意の質と、その位置付け、相互の関連性などを、多数の収集例を通して通史的・表現的に分析している。第四章「疑問表現の否定」では、否定語を伴いながら意味は肯定に偏るという、疑問表現の特殊な否定語の機能は、正答案の確認形式という統一的解釈のもとに、理解できることを示唆している。また表現される事態が被予測事態・被発見事態・現実事態と異なるにつれて、確認効果やそれに伴う情意傾向には差が出てくることも併せて分析し、反語表現もそれらと連続的に把握できることを明らかにしている。第五章「疑問表現の推量語」では、疑問文において疑念の焦点が絞られることを、主体の解答案を固める営みの結果と捉え、その焦点も文末の判断辞との共起においてこそ解答案の判断性を代表できること、その判断辞に推量語の現れる場合は、推量語が辞的な代表資格をより濃く担うことを指摘し、併せて、疑問表現の推量語が強い自問性の明示を基本にしながら、それ以外の種々の働きも發揮していることを、広義の疑問表現について通史的に論証している。第六章「疑問表現の推移」では、広義の疑問表現について、不定方式の疑問表現は疑問詞があれば成り立つことを通史的に確かめ、時代変化のめだつ疑問助詞の構造的ありようを、語形・用法・意味に留意しながら時代別に捉えて構文の論理化という歴史的推移の方向性を明らかにしている。第七章「疑問表現と感動語・呼掛語・応答語」では疑問詞を核とする成分の一語的表現が、感動語・呼掛け語・応答語として、感動語に収斂する事例を多く収集し、表現論的にその諸相を解析して、そういう表現性の由来が広義の疑問表現自体に求められることを論じている。第八章「喚体性の文における疑念の含意」では、一元的な喚体性の文が時に疑念を含意する傾向のあることを、その構文のめだつ上位に採り、中古の「しづ心なく花の散るらん」等、疑問語の省略と解する向きの多いものも、基本的には喚体性の文の含意と見るべき疑惑が、内部の述体的基盤の高まりに伴い、より述体的な形でも解しやすくなっているものと位置づけてよいことを論じている。

第二編「不確定成分とその周辺」は、四章に分れている。第九章「不定方式の不確定成分」では、疑問表現との連続性、および特定方式のそれとの関連を考慮して、その意味の表示性を疑点表示、不定表示、代理表示、網羅表示、強述表示と五つに類別し、通史的なその広がりを明らかにしている。第十章「特定方式の不確定成分—疑問助詞の不確定用法その他—」では、疑問助詞の不確定用法について、並列方式と単独方式とに分け、通史的なその広がりを明らかにしている。第十一章「不確定成分の構成とその推移」では、不確定成分の構成上の特徴とその時代的な推移を考察し、古代語に疑問形式の挿入句が多い理由、中世ごろから種々の不定意味を添える副助詞が出てくる事情などを明らかにしている。第十二章「副助詞「など」とその周辺」では、従来一つの助詞という見方の範囲でしか検

討されなかった「など」「なぞ」「なんか」などについて、不確定成分との関連性を見極め、そこからその示しうる種々微妙なニュアンスの広がりとその由来とを明らかにしようとしている。

本論文は、疑問文は話手みずから可能な解答案を提示することによって成り立つのだという原理から出発し、典型的な疑問文だけに偏りがちであった従来の研究視野を広義の疑問表現に広げ、疑問表現を分類するとともに、疑問文がどのように成立し、疑問表現が時代とともにどのように変遷してきたかを明らかにしたものである。

本文270頁（400字詰原稿用紙換算約700枚）

発行出版社・明治書院

### 論文審査の結果の要旨

日本語の文法史は、これまで品詞論的・形態論的な枠組みのもとに開拓されてきた関係で、疑問文の研究も疑問助詞「や」「か」の分析の研究、疑問詞「いかが」「いかで」などの用法の研究によって明らかのように、おおむね語法的・一面的な事象の変化の研究に止まってきた。したがって従来の研究を寄せ集めてみても全体的な構文史や表現史の姿は容易に見えて来ない。具体的でありながら体系的な日本文法史は、その時代・分野を問わずほとんど未開拓に近い状態であった。

従来、疑問表現は「問い合わせ」の表現意図を中心として考えられてきた。論者は第一章で疑問表現というものは、内面の疑惑と問い合わせに基づき疑惑の解消をめざし可能な解答案を用意し、それが提示される形で示されたものであるとする。これによって、第二章では解答案の提示のしかたを基準とする疑問表現の分類が示されているのである。このような考え方は、典型的な疑問表現だけを考えることから、「疑い」「問い合わせ」「詠嘆」「反語」などの表現を広く考える立場へと連なるのである。同じような表現が場面によって「疑い」「問い合わせ」などの意味を表すことを考えれば、このような考え方は妥当なものと思われる。

本論文は、疑問文を従来のような狭い範囲のものと考えず、広義の疑問表現とし、文構造・文節の相関性を究明しようとする構文論、意味論的な多様性に分析を施そうとする表現論の立場に立って、日本語疑問表現の歴史の全体を見通しているところが評価されるのである。品詞論的な枠組みの中での単なる変遷でなく、構文史・表現史的に全時代を見通すことによってまとめられた通史的研究成果と言えるようなものは、どのように限られた領域においても、これまで存在しなかったと言えよう。本論文は、そのような状況の中でまとめられた最初の文法史研究論文として高く評価されるのである。

第三章以下「疑問表現の情意」「疑問表現の否定」「疑問表現の推量」「疑問表現の推移」の四章は、現象の全体像にとって重要と思われる種々の側面ごとに視座を据えた章である。第七章、第八章は広義の疑問表現の周辺に位置する問題に取り組んだものである。それぞれが論者の独自の立場がいかに有用であるかを示すものとなっている。もちろん、それらをいかにして総合してゆくかは今後の課題とすべきである。

第九章以下は、論者が不確定成分と名づけた表現をめぐる研究である。従来、不定詞の名においてなされてきたいくつかの研究があるけれども、特定方式との相互関係や疑問表現との関連をよく配慮した上での第九章の秩序立ては、本論独自のものであり、多数集めた種々の具体例を通しての分析結果には、従来の研究からは洩れていた細部の現象の指摘や現象の相互関係についての新たな位置づけを示した点が少なくない。第十章以下は不確定成分に関わる種々の側面ごとに論じた章で、それぞれに論者の新見が示されている。

なお、疑問表現をどのように考えるべきかについては問題も多い。特に論者のいう不確定成分を疑問表現とどのように関わらせて考えるかについては、論者とは別の立場をとる研究者もある。本論文が対象とした疑問表現とその周辺という対象領域は意味論的に興味深い多様性を呈する領域である。その多様性は解釈上の問題としては旧知に属するものの、その多様さをもたらす大きな原因とも言える詠嘆・反語の表現や不確定成分のありようについては、それを疑問との関わりにおいて組織的かつ精密に捉えようとする試み自体稀であり、いわば周辺のやっかいな問題として、研究対象としては避けて通られがちであった。その意味で、本論文は、あえてその困難な問題に挑戦し、全体的な説明をなしとげた最初の論文として高く評価されよう。

本論文は、すでに述べたように、文法上、対象範囲上、未開拓な分野についての研究であるから、従来の研究論文から用例を参照することは困難である。大部分の章における考察は、各時代の広範な資料から論者自身が自分の立場で収集した文例によって行われたものである。本論文の内容にもっとも適切な文例を集めることには十分な検討と多くの時間がかけられているのである。従来このような研究の行われなかった理由の一つは、ここで対象とされるような例文が辞書索引などを用いて容易に引き出せるようなものではないところにあるのであり、その点での論者の努力もそれなりに評価されるべきであろう。

もちろん、以上述べてきたことでも分るように、今後に残された課題も多い。論者が、通史と名付けたことも、論者の謙虚さの反映というだけではない。上代から現代にわたる文法史としてまとめるにはなお検討すべき問題が多く残されており、現在は一つの見通しを示す段階であるという論者の判断も窺える。構文論的・表現論的に文法史を考えるということも始まったばかりであり、疑問表現史を考える立場にもいろいろな考え方があろう。

しかし、このように残された課題も多いが、本論文は、疑問表現を例として、構文史的、表現史的に文法史を考えるという新しい方法論を確立するとともに、疑問表現の歴史を論者の立場で上代から現代まで見通してその方法論を実践し、その有効性を示した最初の論考であり、学位申請論文として、十分な価値を有するものと認定する。